

一八八三年四月二十二日(日)

聖ラーマクリシユナ、シンティのブラフマ協会の会員たちと共に

タクール、聖ラーマクリシユナは、シンティにあるベニー・パル氏の別荘に来ておられる。今日はシンティで半年毎に行なわれるブラフマ協会サマージの大祭の日である。日曜日でチョイト口満月の日。ポイシヤク月十日。キリスト暦一八八三年四月二十二日の夕方。大ぜいの会員たちがタクールのまわりをとりかこんで、南のホールに坐っている。日が沈んでから、協会の教師アイチャリヤであるベチャラム氏ウッパサナが礼拝ヒトバの詞を神に捧げる予定になつてゐる。ブラフマ協会の会員たちが時どきタクールに質問している。

一 会員「先生、方法を教えて下さい」

聖ラーマクリシユナ「方法はね——夢中になること。つまり、あの御方(神)が大好きになること。それから、祈り」

一 会員「好きになることと祈りと、どちらが先ですか?」

聖ラーマクリシユナ「神さまに惚れるのが先、その次が祈り」

心をこめて呼んでごらん

大実母かあさんきつと来てくれる

お前の泣き声きいたなら

大実母かあさんこずにはいられない

聖ラーマクリシュナは美しい節をつけてこの歌をおうたになった。

「それから、いつもあの御方の名をとなえたり、讃歌をうたったり、祈ったりすること。古い壺は毎日みがくだろうか？一回こすっただけじゃ、どうにもならないよ。」

そして、識別ツイツイエーカ ヴアラシギヤと離欲だ。——この世の事物ことは、すべて無常で一時的なもの。このことをしっかりと心得ておくことだ」

〔梵協会の会員と俗世の放棄——世間にて無私の仕事を〕

一会員「俗世の生活は捨てた方がいいのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「人によりけりだ。どの人にとっても俗世を離れることがいいというわけではないよ。苦楽の経験をみんな終えてしまった人たちでない、世間の生活は捨てられない。ニアナ(30 cc)の酒で酔えるかい？」

一会員「では、そういう人たちは、俗世の生活をずっとつづけて行くわけですか？」

聖ラーマクリシュナ「うん。そういう人たちは、無私の仕事、つまり、結果に執着しないで仕事を

するように努力することだ。手のひらに油をぬってから、狸好果(カントル)(ジャックフルーツ)の実を割ることだ。金持ちの家の女中は、どんな仕事でもするが、心ではいつも故郷(ニ)のことを思っている。こういうのを、無私(原典注)、無執着の仕事というんだよ。これが、心で捨てる、ということだ。

あんた方のような境遇の人たちは、心で捨てて暮らせばいい。出家(サンニヤーシ)は生活の形の上でも捨てるし、心でも捨てるし、この二つとも実行するけれども……」

〔ブラフマ協会の信者と苦楽経験の卒業——明知の女性の特徴(しるし)——離欲はいつ達成されるか〕

一会員「苦楽が終わるとは、どのようなことでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「女と金の経験のことさ。タマリンドのおいしい漬け物と水がめの置いてある部屋にチフス患者がいると、大変なことになるよ！ なぜなら、病人は無性に漬け物を食べたがつた水を飲みたがるが、それをさせると病状が一層わるくなる。

金、名声、五感(よろ)の欲(よ)び——こういう経験をひと通り終えた後でなけりや、つまり、苦楽の経験を卒業しなければ——たいていの人は神様(よ)のことに熱中できない」

一会員「女性が悪いのでしょうか。それとも、われわれ男が悪いのでしょうか」

聖ラーマクリシュナ「明知(グイディヤー)を持った女もいるし、無明無智(アウイディヤー)の女もいる。明知の女は、男(か)を至聖(か)の方へつれてゆく。無知の女は神を忘れさせ、俗世間に沈ませる。

あの御方(マハト)の大現象(マハト)力で、この宇宙世界はあるんだよ。このなかには、明知現象(グイディヤー)と無明現象(アウイディヤー)の

二つがある。明知現象に支えられた場合は、聖者や求道者とのふれあいや、智識、信仰、愛、離欲などの気持ちがおこる。無明現象というのは、五感の感覚とその対象物——形と色、味、匂い、手ざわり、音、つまり、ひとくちに言えば五感の苦楽をもたらずものだ。これらは人に神を忘れさせる」

一会員「無明がもし、無智の原因でありますならば、では、神は何故そんな無明などというものを存在させるのですか?」

聖ラーマクリシュナ「あの御方の遊戯リイライだよ。暗闇がなければ光の輝きは感じられない。不幸がなければ幸福はわからない。悪クを知ってこそ、善クがわかる。

それからね、ホラ、外皮かわをかぶっているからこそ、マンゴーの実は大きくなって熟うれていくんだよ。実が食べられるようになると、外皮はとって捨てられるだろう!? マーヤーの色かたちをした外皮があればこそ、だんだんとブラフマン(宇宙の大原理)の智識が育ってくるんだよ。だから、明知と無明の二つのマーヤーは、マンゴーの皮のようなものでね、二つとも必要なんだ」

一会員「では、有形の神(人格神)を拝んだり、土でこしらえた神像などを拝むのは、いいことなの

(原典註1) 君の義務は 行為することのみにある 決してその結果にはない

——ギーター2, 47——

何を為しても 何を食べても 何を供え 誰に何を賜たまっても

またどのような修行 苦行をしても クンティの息子よ 全てはわたしへの捧げものとせよ

——ギーター9, 27——

〔(真典註)で
すか?〕

聖ラーマクリシュナ「あんた方は形ある神を認めたがらない、それも結構——。あんた方にとって必要なのは、神像じゃなくて神への熱中だ。あんたたちは、クリシュナに対するラーダーの焦がれようを見習うことだ。あの、愛の力をね。人格神を信仰する人たちが、大実母カーリーやドゥルガーを拜むとき、大実母、大実母と、どんなに一生懸命に呼ぶか、どんなに愛情込めて拜むか——あの気持ちを見習うことだ。たとえ神像は拜まなくてもな」

一会員「離欲はどうすればできるのでしょうか? 大部分の人たちができないのは何故でしょうか?」

聖ラーマクリシュナ「苦楽の経験を卒業しなければ、離欲の気持ちは出てこないよ。小さい子供は、食べ物や玩具をやると、すぐだまされる。だが、食べ物も食べてしまい、玩具で遊ぶのにもあきると、『お母ちゃんのところへ行くーッ』と言う。母親のところへ連れて行ってやらないと、玩具をぶん投げて声をはりあげて泣き出す」

〔サッチダーナンダこそが師匠、神をつかんだ後は夕拝などはいらなくなる〕

ブラフマ協会の会員たちは、ヒンドゥー教の伝統的な師匠制度には批判的である。それで、会員の一人がそのことに関する話もちだした。

一会員「先生、師匠につかなくては智識は得られぬとお思いですか?」

聖ラーマクリシユナ「サッチダーナンダ(実在・智慧・歓喜)—ブラフマンの実体・無形の神—こそが師匠なんだ。

もし、ある人が師匠グルとして、霊の意識を目覚めさせてくれたのなら、それこそ、ほかでもないあのサッチダーナンダが人間の姿になって現れたのだ、ということをはつきり心得ておくことだ。グルは仲間のようなものでね、手をとって目的地に連れていってくれる。だが、至聖かみを見た後は、グルとか弟子とかいう感じはなくなる。それは大そう厄介なところ、師匠と弟子もないところだからね。ジヤナカ王はシユカデーヴァにこう言いなすつた。「ブラフマンの知識を教えてほしいなら、先に授業料をよこしなさい」と。

なぜかと言えば、ブラフマン智を得たならば、もう師匠と弟子の区別はなくなるからだよ。師弟の関係は、神を見ない間だけだ」

夕暮れになった。会員のなかの誰かがタクルに申し上げた——「夕拝をなさるお時間でございませう」

聖ラーマクリシユナ「いや、どうでもいいのさ。そういうものは、はじめのうちは一つ一ついいねいにやらなければならぬが、後あとになれば、コーシヤクシなどの祭具どうぐや規則きまりなんか必要なくなるよ」(訳)

(原典註2) ケーシヤブは言った——「土でこしらえた女神像にも、ちゃんとたましいが宿っている」(ラーマクリシユナの教え)

註、コーシャクシー——祭式の時に使う魚の形をした銅製の大小二組のさじ)

聖ラーマクリシュナとベチャラム師——ヴェーダーンタと靈的知識に関して

日が暮れて、アーデイ・ブラフマ協会の教師、ベチャラム氏が壇上に坐つて祈りの詞を先導した。合間にブラフマン讃歌やウパニシャッドの朗詠が入った。礼拝式が終了すると、ベチャラム氏は聖ラーマクリシュナのそばに来て坐り、さまざまな話をした。

聖ラーマクリシュナ「無形の神も眞実だし、また、有形の神も眞実です。あなたさんはどうお考えですか？」

〔有形の神、無形の神、靈姿と信者〕

教師「おっしゃる通りです。無形の神はエレクトリック・カレント(電流)のようなもので、目には見えませんが感じることはできません」

聖ラーマクリシュナ「そう、二つとも眞実だ。^{ほんとう}神には形がある。神には形がない——この両方ともホントウなんだ。神は無形だとばかり主張するのは、何に似ているか知ってるかい？ 楽隊のなかの一人が、笛の一つの穴からブォーツといつまでも同じ音を出しているようなものだよ。七つも穴があるのね。もう一人は七つの穴を使って、いろいろな美しい調子を出している！

そんなふうにして、有形の神を信仰する人たちは、神様をさまざまな方法で愛して喜んでいる。し

みじみと静かな気持ち（シャインタ）。召使いのような気持ち（ダーシャ）。友だちのような気持ち（サッキヤ）。母親のような気持ち（ヴァツツァリヤ）。恋人のような気持ち（マドゥラ）——実にはいろいろな心の態度で神を味わっているわけだ。

とにかく、どんな方法でもいいから、あの不滅の甘露をたたえた池に入ることだよ。讚美歌をうたひながら静かに入ってもいいし、誰かに突きとばされて転げ落ちてもいい、結果は同じことさ。両方も、まちがいになく不死となる。（原典註3）

あんた方ブラフマ協会の人たちには、水と氷のたとえがいいだろうな。サツチダーナンダは無限の水のようなものだ。大洋の水は、寒い地方ではところどころ氷の形になっている。ちようどそんなふうに、信仰という冷やす力によって、あのサツチダーナンダがその信者のために人格神（有形の神）の形をとって下さるんだよ。古代のむかし見神者リシたちは五感を超えた感覚で靈姿に会ったり、その御方と話をなすつたりしたものだ。しかし一般の信者は、神への愛にもえた体——つまりパガヴァティ・タヌ靈元子によってその靈姿を見ることができ（原典註4）る。

（原典註3）ブラフマン、これ不滅なり。ブラフマンは前にも後ろにも、右にも左にも、そして上にも下にもあまねく広がる。この世界、これ至高のブラフマンなり。——ムンダカ・ウパニシャッド 2・2・11——

（原典註4）主にお仕えるために、パガヴァティ・タヌ（形のない純粹な愛の体）を与えられた時に、ブラーラプタ（行為を引き起こすカルマ）はすべてなくなり、あたかも着古した衣服を脱ぐように、五大元素で出来たわたしの肉体は消えてしまったのです。——シユリーマッド・バーガヴァタ 1・6・29——

それからまた、ブラフマンは言葉や思考かんがえを超えている。智識の太陽の熱によって、有形の神である水は溶けてしまう。ブラフマン智に達した後とか、無分別ニルツイカル、サマヤイ三味の後は、また元もとの無限絶対で言葉や思考を超えた無形無相のブラフマンになるんだよ！

ブラフマンはどういうものか口で説明することはできない。黙っているほかない。無限者を口で説明することなんて誰にだつてできやしない！鳥がどんなに高く翔とんでも、まだ上があるんだよ。あなたさんはどう思いますかな？」

教師「おっしゃる通りでございます、ヴェーダーンタにも、それと同じような言葉があります」

〔無相無性のブラフマンは言葉や思考、三性トリグナを超えている〕

聖ラーマクリシュナ「塩人形が海の深さを測りに行ったが、戻ってきて報告することはできなかったとさ。聞くところによれば、シュカデーヴァのような人たちは、岸まで行つて海を眺めたり、水にさわつたりしたが、中には入らなかつたそうだ。

わたしはヴィディヤサーガル(風見社)にこう言った。あらゆるものは食べカスになつてしまつたが、ブラフマンだけは口がつけられていない、とね。——つまり、ブラフマンが何であるか、誰も口で説明できないということだ。口で言えば、もうそれは食べカスとなるわけだ。ヴィディヤサーガルは大学者だが、わたしの話をきいてとても喜んでいたよ。

ケダル峰ケダルナド(ヒマラヤの峰でヒンドゥー教徒の巡礼地の一つ)のあたりには、氷で覆われた山があるそうだ。

あんまり高く登ると、もう戻ってこれなくなるそうだよ。うんと高く登ったら何があるのか、どんな景色なのか、知ろうして行った人たちは戻ってきても報告してはくれない。

あの御方に会ったら、人はよろこび歎喜に我を忘れて黙ってしまふ。だから、誰も報告しようとしなない。一体、だれが説明できる？

七つの門の奥に王様がいる。一つ一つの門には威風堂々とした人物が坐って番をしている。門のところへ来るたびに弟子はたずねる。『この人が王様ですか？』そのたびに師グルは答える——いや、ちがう。いや、ちがう。七つめの門を通って、そこに見たもので、人は全く感きん極ままってしまふ！(原典註6) 歎喜に圧倒(原典註7)される。そしてもう、『これが王様ですか？』などと聞かない。一目見ただけで、あらゆる疑問はとけてなくなるからね」

教師「さようでございます。ヴェーダーンタにもそのように書いてあります」

聖ラーマクリシュナ「あの御方が、創造、維持、破壊をなさると見る時、有属性サツナブラフマン、また

(原典註5) 想像することも、説明することも出来ず、唯一、自己を確信させる本性にして、全ての現象を消滅させ、静寂で、至福にあふれ、不二なるもの。—— マインドウーキヤ・ウパニシャッド7——

(原典註6) ブラフマンの歎喜を知れば、如何いかなる時にも怖れなし

—— タイッテイリーヤ・ウパニシャッド2・4・1——

(原典註7) 心の結び目はほどけ、すべての疑念は消え去り、行為は尽きる。

—— ムンダカ・ウパニシャッド2・2・8——

は、^{フアディヤシヤケテ}根元造化力ニと云う。

あの御方が三性(トクナサツクワラシニス タマス)(調和、積極、消極)を超えていると見るとき、^{ニルツナ}無屬性ニプラフマンニ、^ニ言葉と心を超えたものニ、また^ニ至高ニプラフマンニと云う。

人間はあの御方の現象(マイヤ)に迷つて、自分の本性を忘れてしまう。自分が父の無限の栄光の相続人なのだということを忘れてゐる。あの御方のマールヤーは三性(トリクツナ)から成つてゐる。この三つの性は盗賊でね、わたしたちから一切合切奪つて行つてしまふ。本性を忘れさせてしまふ。三つの性はサットヴァとラジャスとタマスだが、このなかでサットヴァだけが神への道を示してくれる。だがサットヴァ性でも、神のところへ連れていつてはくれないよ。

一人の金持ちが森のなかを通つてゐると、三人の盗賊が出てきて、その人を取り囲んで財宝をみなとりあげた。何もかもふんだくつてから、一人の盗賊が言つた——『もうコイツに用はない、殺やつちまえ』こういつて斬りつけようした。第二の盗賊は押しとどめて言う——『殺すこともないさ。手足を縛つてここにころがしておこう。そうすればお巡まわりに知らせることもできまい』こう言つて、その金持ちをぐるぐる巻きに縛つて盗賊どもは立ち去つた。間もなく第三の盗賊が戻つてきた。そして、『アー、お前さん、ひどい目にあつたな。え、そうだろ？ このオレさまが繩をほだいてやるう』と言つて繩を解といてやり、いっしょに道案内をして歩きはじめた。街道のそばまでくると盗賊はこう言つた。『この道を行きな。そうすりや自分の家へ帰れるよ』その人は言つた。『何をおっしゃる。あなたもどうぞ、私といっしょにおいで下さい。あなたは、私にホントに親切にして下さつた。私の邸にお寄り

ただけなら、家族のものもどんなに喜ぶことでしょう』——すると、第三の盗賊は答えた。『いや、オレはそっちには行けないよ。お巡りに捕まるからね』こう言つて森のなかに立ち去つた。

第一の盗賊、つまり、『もう用はない、殺つちまえ』と言つたのがタマス性で、これによつて破壊や死がおこる。第二の盗賊はラジャス性だ。これによつて人間は俗世間に縛られ、いろいろな仕事にまきこまれる。ラジャス性は神のことを忘れさせる。

サットヴァ性だけが神への道を教えてくれる。慈悲心、正義、信仰といったものは皆、サットヴァ性から生じる。サットヴァ性はちょうどハシゴの一番上の段のようなものだ。その先は屋根——至高のブラフマンが人間の本来の住居すまいなんだよ。三性を超えなければブラフマン智は得られない」

教師「結構なお話を聞かせていただきました」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ——。信仰者の性格つてどんなものか知っているかい？ オレが話すからお前はお聞き、お前が話すならオレは聞くよっていうようなものさ！ あんたは教師だ。オレが分大ぜいの人に教えているんだらうね。あんたは大きな汽船、わたしは小つちやな釣り舟だよ」

(一同笑う)